

杓底一残水  
汲流千億人

## 意義深い三日間の旅

# 永平寺と総持寺祖院参拝の旅

### 第一日

「五年越しの念願がようやくやつかないました」という伊藤婦人会長さんの述懐は、この旅行に参加した一同のよろこびを集約したものだつた。

平成四年九月三十日、新幹線も遅れるかと思うほどの土砂降りの雨だつたが、実はこの雨、本山参拝に出発する者の俗塵を洗い流してくれる身代り不動明王の少々手荒い慈悲の雨だつたように思う。それが証拠には誰一人遅刻する者となぐ、列車に乗った頃はすっかり晴れ上がり、爾来快晴のもと快適な旅を続け、身代り不動明王の化身のような方丈さまのリードで全員法悦にひたつて帰ることができたからである。

八時五十九分新横浜発の列車に乗り込

んだ一行五十名は米原で北陸線に乗り換え、十二時十七分福井駅に到着した。本山上山まではまだ間があるので、北陸海岸随一の名所東尋坊にバスを走らせ、昼食・観光のち永平寺に向かった。車中、添乗員の永島君が、「いよいよこれから永平寺に向かいます。お山の中の注意事項を申し上げますが、皆様覚悟のほどはよろしうございますか」という。一瞬車内にひやりとした空気が走り、ついでそれを打ち消すかのような笑い声があがった。「信仰と観光、同じコウでもこうまで違う」これはガイドの言葉だが、この一瞬から車内の空気は一変した。

四時少し前、永平寺門前に着く。

ここで私（佐藤俊明老師）は五十年前のことを思い出した。私が修行中のこと、永平寺では「眼蔵会」といって『正法眼

蔵』の提唱を聞く会が年に一度設けられているが、岸澤老師の提唱の中にこんな話があった。海軍大学の学生が永平寺で参拝した。一行より遅れて、夜、福井駅に到着した講師の一人の金子中佐は、駅前からタクシーに乗った。ところが永平寺口まで来ると、運転手は「これからさきは行かれませんか」という。「約束が違う」と、金子中佐は怒り出したが、運転手は平あやまりにあやまるだけで、さっぱり埒があかない。「それじゃ、代わりの乗物をさがして来い！」ということになり、運転手は人力車を連れて来た。金子中佐は人力車に乗り換えたが、「けしからん、けしからん」といっている。岸澤老師コメントして曰く、「人力車にはもう金子中佐はいない。乗っているのは天地いっぱいのけしからん奴だ」と。

やがて人力車が永平寺に近付くと、谷

川のせせらぎあり、老杉あり、車夫は黙々としてあえぎながら車を引いてゆく。この素晴らしい光景に、「天地いっばいのけしからん奴はだだんだん小さくなつてく」る。やがて永平寺の下乗碑の前に着くと車夫は、「車はここまででござえます」と下乗をすすめ、提灯を持って案内してくれる。参道の両側のうっそうとした老杉、葉陰からほのかにもれてくる月の光。「もうこうなると、けしからん奴はすっかり姿を消し、黙々として歩むは天地いっばいの清浄身のみ……」と。

ましてや永平寺参拝を五年越しの念願としてようやくここに辿り着いた私ども一行には、「峰の色 谷のひびきも みなながら わが釈迦牟尼の 声と姿と」(道元禅師) となつて感じ取られるのであつ

た。

正門の石の門柱に、

杓底一残水 (杓底の一残水)

汲流千億人 (流れを汲む千億人)

と刻まれている。

これは、道元禅師が日ごろ水をお使いになるとき、必要最少限の水を器にとり、柄杓の底に残つた水をもとの谷川に戻されるのを常としておられた。不審に思つた侍者がその訳をたずねると、「児孫が水に不自由しないように」と答えられたという故事を謳つたものである。水のようにふんだんにあるものでも、なおかつ有難い、つまり有ることが希である、その希有なるものがたまたま与えられたその恵みによるこび感謝し、能う限りこれを最高度に活用し、その余徳をば後の世の人びとのためにふり向けるという尊いお



心、このようにして道元禪師の残された  
仏法の水が七百五十年を経た今日、いま  
なお数限りない多くの人びとの心の渴き  
をいやしているのである。

大勢の参籠客にまじって建物の中に吸  
い込まれてゆく。当初は、瑞雲閣の宿泊  
定員に合わせて一行四十名を限度と打ち  
出したのだが、応募者七十数名に達して  
しまった。諸般の事情を考慮して五十名  
で打切らざるを得なかったが、それでも  
十名は瑞雲閣からはみ出してしまったの  
で、これは吉祥閣に泊ってもらったこと  
になった。宿泊場所が二カ所に分かれたの  
で、事務局はたいへんだった様子。

五時、貫首禪師様がお会いくださると  
の侍局よりの通報に接し、方丈さんと私、  
蒔田師と富永事務局長、婦人会伊藤会長  
と中村副会長、山口青年会長と新井事務

長の八人が拜問することになり、不老閣に登った。

丹羽禅師様は八十八歳の高齢だが矍鑠としておられ、二十三日からの御征忌(道元禅師の開山忌のこと)で、全国末派の寺院が本山に出仕して報恩の誠が尽くされる。この間、全国寺院の代表が貫首禅師に代わって焼香する。二十三、二十四日は二祖国師、孤雲懷奘禅師の示寂祥忌、(二十八日と二十九日は道元禅師の示寂祥忌に相当している)を勤め終えられたばかりで、「高祖様も昨日承陽殿にお帰りになられたばかりです」と仰せられ、「高祖様の七百五十回大遠忌も十年後に迫っておりますので、それまでに一日でも近付けるよう精進したいと思っております」と決意のほどを披瀝され、そして「善光寺さんはまことに尊いりっぱなお仕事

をなされ、常々感服しております」とその労をねぎらわれました。方丈様は、「現在十カ国に四十一名を派遣いたしております」と前置きして育英会の現況をかいまんで報告され、たいへんなごやかなふんいきのうちに拜問は終わりました。

拜問終了と休む間もなくすぐ夕食となり、佐藤典座老師指導のもと雲水が腕によりをかけた本山ご自慢の精進料理に舌つづみを打ちました。

休む間もなく六時五十分からは吉祥閣二階の二百畳敷大講堂で坐禅、引続き法話。坐禅指導と法話をされたのは小野崎秀通老師。この方は、方丈さんが会長をつとめる日本パクナム会の副会長で、やはりワット・パイナムで修行された人。永平寺では海外経験豊かな人材を起用し、国際化の充実をはかっている様子で、

正伝の仏法の海外進出、指導者育成が望まれるところである。

ついで映画をみての研修があり、八時三十分修了。九時開枕（消灯）となり、第一日の日程を無事終了した。

## 第二日

さすがに緊張して眠れないのか、となりの部屋では二時ごろから話し声が聞える。三時ともなると、洗面所にゆく足音がしきりとなり、眠ったり目覚めたり、また眠ったりしていると雲水の「起床です」という声がかして目が覚めた。なるほど時計を見たら三時五十分、振鈴（起床の合図）十分前である。

一同洗面のおえるのを待って大光明蔵に案内される。畳二百九十八枚の大広間で、貫首禪師が公式に來山寺院や檀信



徒と相見する室である。北野元峰禪師揮毫の「転大法輪」という額が掲げてある。貫首禪師が説法するところから大法輪を転ずるというのである。

この日は参籠の団体が多く、九州は宮崎、佐賀、東北は仙台といったふうで、瑞雲閣泊りの私たちはさすがに一番早く入堂し、他の団体を待つことしばし、全員そろったところで貫首禪師の御名代池田副監院老師の法話がはじまった。

法話は道元禪師御一代の御事蹟中、とくに入宋求法までを詳しく述べられた。

法話終つて法堂に登り、ゆるやかに『舍利礼文』が読誦される中、進前して御開山道元禪師、二祖懷奘禪師に御挨拶申し上げる拝登諷経、終つて供養諷経が団体ごとくに次々におこなわれ、全部終了したところで退堂して監院老師拜問。禪師様拜

問と同じメンバーだったが、話はまた禪師様と同様、善光寺さんの素晴らしい活躍が話題となり、方丈さんは（物的整備より）人材養成を優先しなくてはと強調、監院老師が聞き役にまわる一幕もあった。

何しろ時間がなく、諸堂拝観はそこそこにして朝食後下山、時に八時。

バスに乗ってはじめて「信仰から観光へ」と心が切り替わり、「コウはコウでもこうも変わるものか」と、だんだんくつろいだふんいきになってきた。バスは福岡県から石川県に入り、押水町今浜から羽咋市までの八キに亘る「千里浜」として有名な波打際の天然ドライブ・ウェイを走り、その終点で昼食、少憩ののち大本山総持寺祖院に向かう。

道元禪師様は四十四歳の時永平寺をお

開きになり、また『正法眼蔵』という素晴らしいご本を九十五巻お書きになり、すぐれた弟子を養成なさいました。しかしながら残念なことに五十四歳でお亡くなりになりました。さいわいなことに、道元禪師から四代目に瑩山禪師がおでましになりました。

瑩山禪師様は、上下貴踐の別なく、また老若男女を問わず、遠近のわけへだてなく、実に多くの人びとから慕われ、帰依を受けられた、まことに衆生縁の厚いお方で、大勢の信者を教化済度なされ、すぐれた多くの弟子を養成され、また諸処方々にお寺をお開きになり、五十四歳の時総持寺を開かれたのであります。

瑩山禪師に篤く帰依された後醍醐天皇は綸旨を下され、総持寺を勅願所として、「曹洞賜紫出世第一の道場」と定められ

ました。

爾来、寺運益々隆盛をきわめ、全国にその末寺一万六千余を数えるに至りましたが、明治三十一年四月十三日、不幸にして災禍により七堂伽藍の大部分を焼失しました。これを機に、皇居が京都から東京に移った新しい日本に即応して布教伝道の中心を首都圏に移そうということになり、横浜鶴見に本山を建設し、現在地は祖廟として次々に堂宇が再建され、山内二万坪の境内には焼失を免れた伝燈院、慈雲閣、経蔵などのほか七堂伽藍も建立され、山水古木と調和し、風光幽玄な大本山の面影をしのばせております。

生憎監院老師は御不在でしたが茶菓の準備をととのえて待つてくださいました。有難く頂戴して退出、輪島に向かいました。



輪島といえは輪島塗りの本家本元。善光寺さんに数々の逸品を納めている若島宗齊先生が使いの者を派してわざわざ祖院まで出迎えてくださったので若島宅におうかがいしました。広々とした邸宅のところせましと展示された逸品の数々は目をみはるばかりだった。ついでこれまた善光寺さん出入りの輪島屋本店にゆく。ここでは庶民に手ごろな品が多く、一同シヨッピングを楽しんだ。

もう四時も過ぎたので、ここから和倉に直行することになり、両本山の拝登も無事修了したこととて車内はすっかりリラックスした気分になり、今晚の楽しい宴席の下地は充分出来上がったもののようにである。

五時半過ぎ和倉温泉米久旅館に着く。永平寺では時間がなくて入浴出来なかつ

た人も多かったので、ここで二日間のつかれをすっかり洗い落とすことになった。そして生まれ変わったような気分が宴会がはじまる。どこでも主役は方丈さん、歌はうまいし、座持ちはよし、パフオーマンズは独特、それにつられてカラオケで美声を披露する人続出、おひらきまで誰一人席を立つ者がいない。まことにたのしいものだった。

### 第三日

八時十五分出発、途中で海産品のシヨッピングをたのしみ、一路金沢兼六園へ。兼六園は江戸時代の代表的な林泉回遊式大庭園の特徴をそのまま遺している。日本三大名園の一つであることは周知のことである。ここで一時間、少々あつい日差しの中を散策してのち、料亭「秋月」

で金沢料理を満喫し、バスは米原に直行。このバスの中もいわば方丈さんの独壇場で、一同いくたびか抱腹絶倒、時の経つのも忘れて、三時米原に着き、ここでバスの運転手とガイドさんに三日間の労を謝して別れ、新幹線は所要二時間少々、あつという間に新横浜に着く。「また企画してほしい」声のしきり、楽しく、そしてまた意義深い三日間の旅だった。

XXXXXXXXXX  
いただいたお手紙から

## 心に残る参拝の旅

XXXXXXXXXX

◆ 此の度の永平寺参拝の旅の折には、何から何までの濃やかなご配慮いただきまして、肉親にもまさる程の和やかな日々でございました。日頃はお近づきがたい御老師さま、方丈様の身近での時

間を過させていただきましたことも有難いことでもございました。又とない御本山での一日、貴い時間でもございました。今更ながら仏様の教えの尊さと、歴史を心から思いおこさせていただきました。加えて善光寺様あつての此の旅を心から感謝しております。心に思いますことも、気持ちだけ先走りペンが進みません。厚く厚く御礼申し上げます。どうぞ益々御元気で善光寺さまの御繁栄を祈り上げます。

横浜市緑区 石川多加子

◆ 此の度は永平寺参拝旅行にお供させていただきありがとうございます。方丈様はじめ皆々様に御親切にしていたいただき、厚く御礼申し上げます。秋色深いみ寺に参籠致し結構な御法話に接し先祖の

供養させていただき唯々感激にたえませ  
ん。厚く御礼申し上げます。

横浜市保土ヶ谷区 岡島時代

◆ 過日の北陸旅行に際しましては大変  
お世話になり心より御礼申し上げます。  
おかげ様にて永平寺における立派なご回  
向を頂き、又、貴重な体験や数々の楽し  
い思い出をつくれました事、ありがとうございました  
存じあげます。方丈様始め皆様のご苦  
勞と御志に重ねて厚く御礼申しあげま  
す。次回にも許される限り参加させて頂  
きたいと今から楽しみに致しております。  
ありがとうございます。

横浜市南区 高橋八重子

